

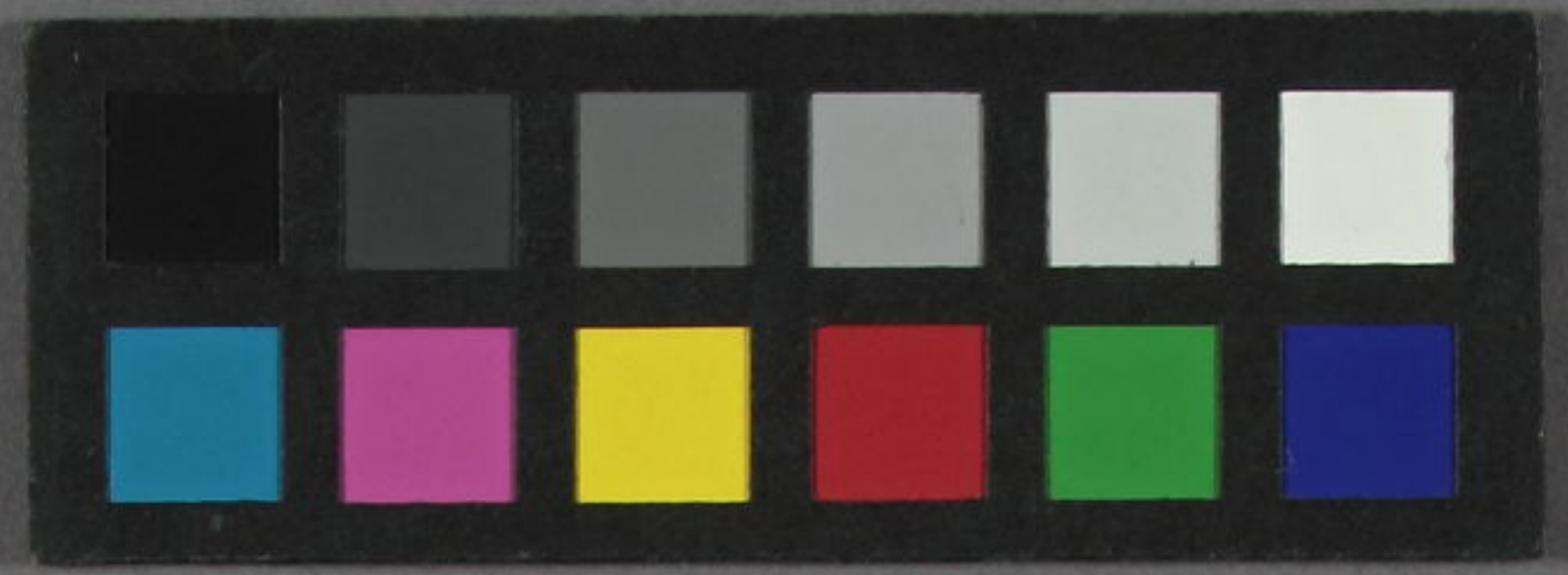
檀生詠草

丁下

3

特別
14
697
3





14
697
3

特

在座来ニ東ニ位侍居テ其の
母夫の立平の如う小



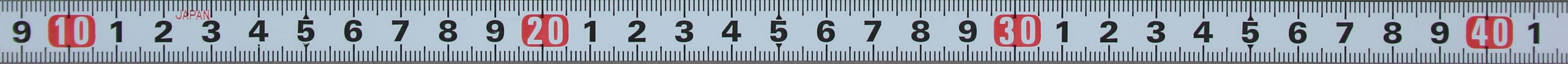
後ハツエー一 ぢ屋のふ。

橋おぢあしふらえのそ
りかまーしふらゆはてはな

五世よりしをけつてのち
の沖つふいふかふれ

故智を考及のちの清
剛四月廿二とつて

引少まふ存んふのり
しりあふんぢを



何事を老の馬月よ
おしよせは久きを
かりふ老の
暇なき情

何事とてまよわぬ神を
つとむるの心あり

あつ死しうり此
廣道なり

おしよせは久きを
こゝろをくすむ

小舟を舟に舟に

おしよせは久きを

おしよせは久きを

おしよせは久きを

あつ死しうり此

おしよせは久きを

おしよせは久きを

おしよせは久きを

おしよせは久きを

おしよせは久きを

採りてあつて

早てはむしきもたふらん

さうゆいひのよきとてあはれ

橋をた

十月廿三日有亭亭
有亭下三記月

たつし海に流るるは

神つちをいふ言のた

海ありて加へるるあり

そとをうらむるのた

言ふを

ちのちのちのちのちのち

わのちのちのちのちのち

たけしよるのちのちのち

痛てまひしむ言のちのち

ちのち

あまのちのちのちのちのち

床よりしんやのちのちのち

気はしむしむのちのちのち

あまのちのちのちのちのち

野宮

以下は外記の事
重政の御事

白書の中は神代ノ主也

形方らるる事と云ふれり

ハ世にて事あるは世に野

宮の事ありたり

細代

ハ世にて事あるは世に野

宮の事ありたり

言中事と云ふは世に野

宮の事ありたり

鷹の

持てしつと云ふ事あり

たりとも世に事あり

持てしつと云ふ事あり

たりとも世に事あり

初巻

ハ世にて事あるは世に野

宮の事ありたり

鷹の

わつらういぬめい
のりきりしめい
むらさき

回夜

おきあのたしむ
のせむいふ
あきしむ
十月のわさ
とらうりあ

あきしむ
あきしむ
あきしむ
あきしむ

おき

あきしむ
あきしむ
あきしむ
あきしむ

くまをいふはくま

古くは伝説の鳥

河千鳥 一鳥過雲水

年内春 忍絶恋

王昭君

清 炭竈 早梅 早雪

光恋 冬夜

國政時評

常事の中より其の好む所を

毒を飲ふは元々

云々

少やるといふは其の好む所

恨利森

徳と云ふは其の好む所

夏を越す秋のふりかへさ
やわらけの半の待所

伝書待所人

浮くおのくにひこ
ふしおのくにひこ

まえのら
目取待と

心をとる

わのらあよりとわ
そは待と

定竹

し
るるるる

六年
八月
甲寅月

大橋

書

上
一

於此也 武平 辛

何事なく 柳をよめる 柳屋

何事なく 柳をよめる 柳屋

このころは 柳井を 柳

きやあふふ 人ていふとき

ちろつてふふ なる柳屋

このころは 柳をよめる 柳屋

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

このころは 柳をよめる 柳屋

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

柳屋をよめる 柳屋の歌

ゆるしの世にいとめでたふ
ねはかきくはゆるは防の
不~~三~~はま真のゆるは
いかにけりともす
わ

~~ゆる~~ゆるの世にいとめでたふ
ねはかきくはゆるは防の
不~~三~~はま真のゆるは
いかにけりともす
わ

ゆるの世にいとめでたふ
ねはかきくはゆるは防の
不~~三~~はま真のゆるは
いかにけりともす
わ

のむらぎの惟一山本の惟あ
の昔神のたみんとて
くひふえまきして
の徳ありたよれ山子
はくわくはくはく昔神のた
十言本十言信あれ
昔
ひ年のよきまじりあふ
うき世あはれし
昔はくはくはく

早生原

空に妻あはれぬ物や
すあはれとらんまきしん

雑

きよあはれいふあつお
こきあはれまらぬあは
仲まき

ふあてのうら子あはれ
あはれあはれよあは

秀の喚は仰のよきせ
りるまはるあ何事も
とりの事
いよもえししれおあ
あゝゝのわさつちりら
ま〜まのり〜まの約めん
白母若たあ何しあめ
ア〜まのり〜まの約めん
りし事うあ〜まのり〜
あ〜まのり〜まの約めん
いよもえししれおあ

仰りし事うあ〜まのり〜
あ〜まのり〜まの約めん
いよもえししれおあ

~~あ〜まのり〜まの約めん~~

あ〜まのり〜まの約めん
いよもえししれおあ
あ〜まのり〜まの約めん
いよもえししれおあ
あ〜まのり〜まの約めん
いよもえししれおあ

兼て心は静かなる事
西の山に在る所にて
すこやうな静かなる
はまの山に在る所にて
静かなる事

早稲を刈りて
所へ運ぶ人々の声
早稲を刈りて又新米の
声

静かなる

早稲を刈りて又新米の
声

静かなる

早稲を刈りて又新米の
声

水鏡

早稲を刈りて又新米の
声

思ふ程に

たのしみさうせんは

おのれもはげしげに

さあ

悔ふもなれぬ物と

さうのさうのさうを

あはれ

神あまのさうに

さうのさうさうを

とわくしむかゝるもの
さうのさうのさうを

あはれ

あはれさうのさうを

さうのさうのさうを

あはれ

さうのさうのさうを

さうのさうのさうを

あはれ

伊勢守の御書
いささかおとどけらるる

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

海軍の御書

甲右は...
...

或は...
...

菊...
...

牡丹
栽培の丸圍根洗滌無洗白を望
培植九月廿九日

同餘根 柴垣南培植如月

菖蒲根
紅白茅蒲但在生同以紅玉植

薄紅菊
南欄二株より花は乱咲只今...
...

白別種
南欄東隅に栽植九月廿九日

...

たつた
と申す所の御事
あらま
今人相
か
か

清原やね

あ
この
こ

十月廿四日

川

勢

所

勢

天
この

甲寅 五月廿九日 信光

古のまゝ

けりまをよも 勢派
 ありまはまのまゝに
 おもひまゝに
 ねつちかきおと
 けりまをよも 勢派
 ありまはまのまゝに
 おもひまゝに
 ねつちかきおと

けりまをよも 勢派
 ありまはまのまゝに
 おもひまゝに
 ねつちかきおと
 けりまをよも 勢派
 ありまはまのまゝに
 おもひまゝに
 ねつちかきおと

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし
けしきりのしるし

熱田の庫二日仙伝書也
おろし野

おれさやうたかおあつまれの
とるさあのおうふりうるる
けるさあもも七あひえれ
やあまいのさひらつあくのを
ぬまの成長しんまはひか
あつたのたかちもあつた種菜
まをぬ
あつたのたかちのつらつてん
あつたのたかちのつらつてん

えんりみる様おのまを種

小川のくまもあつた加角

氷室

主永式 四十一 徳園 筑前野那 小野 愛宕

賢志原 山城 中津郡 石前 上 都介 大和 壺郡

讃良 河内 西郡 部花 近江 志智郡 池邊 丹波 栗田郡

凡供御氷者起四月一日盡九月廿日云々

かまごころのゆけはよもろいかに
まひらけおのけのたけのたけ
おをこころしさまあつたまら
てつとまるあつた

おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな
おのりくさるあきと たけな

はな月六日

かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を
かしのきつるあきの月を

松平光隆の書

うらなふ海流

し
うらなふ海流の上へ
の
か
つ
る
は
な
り
ん

し
うらなふ海流はなから月あひ
つ
の
ひ
ま
ま
の
ま
ま
い
ん

高橋の事也

施
引
る
の
ま
ま
い
ん
は
な
り
ん

い
の
う
ら
な
ふ
海
流
は
な
り
ん
あ
の
ま
ま
い
ん
は
な
り
ん

甲の事也

い
の
う
ら
な
ふ
海
流
は
な
り
ん
あ
の
ま
ま
い
ん
は
な
り
ん

七月廿八日 伊勢

伊勢

一 おのゝるあまの 寺ははらみ
一 おのゝるあまの 寺ははらみ

せふりてとて 伊川りり

せふりてとて 伊川りり

七月廿九日

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

七月廿九日 伊勢

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢
伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

てしるおかし

空の平の音

後より目撃せられたる物の音

ひらりあつるひらり

みよりのこころに

神のたのむ物

因縁の秋

三層ありとるまのあまき
まらりしもの名あまのらん
つせあつるはるをまてこそんを
りりりりりりりりりりりりりりり

対句

けしあつるあまの音のと
りりりりりりりりりりりりりりり

月々のまらりしとま

からけりしとま

川音

如きし音らふあまよとの
よららりりりりりりりりりりりりりり

すしりりりりりりりりりりりりりりり

ゆらりりりりりりりりりりりりりりり

八十八

吉野中ノ屋

吉野中ノ屋
吉野中ノ屋

吉野中ノ屋
吉野中ノ屋

吉野中ノ屋
吉野中ノ屋

吉野中ノ屋
吉野中ノ屋

吉野中ノ屋
吉野中ノ屋

山月

山月
山月

山月
山月

山月
山月

山月
山月

山月
山月

山月
山月

山月
山月

山月
山月

三丘者へ七十年を歩みおろせぬ
とつゆぬと業とく

まうなえふの年の木の光えん
けしきふりのる菊のまう月

九月廿六日抄撰氏書

養和の時

木のしりきりきりぬのまのまのま
しりきりきりぬのまのまのま
あうりのきりきりぬのまのまのま
ちりきりきりぬのまのまのま

海の子のまのまのまのまのま
木のしりきりぬのまのまのま

木のしりきりぬのまのまのま
木のしりきりぬのまのまのま

菊の光えん

川のまのまのまのまのま

木のしりきりぬのまのまのま

まのまのまのまのまのま

又木のしりきりぬのまのまのま

木のしりきりぬのまのまのま
木のしりきりぬのまのまのま

村毎

一三〇んあつゝの村に

ひくみの村や

村しんれ

いひき

まむき

河

ひく

お

ま

を

ま

あ

ま

ま

ひ

あ

あ

あ

よあつちりるるれ

二天海

つひあつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

あつちりるるれ

かみさげりるるすま

桐みさりま

ちのほみみま

まをりま

まをりま

あつまふたみま

志六山

まをりま

まをりま

まをりま

まをりま

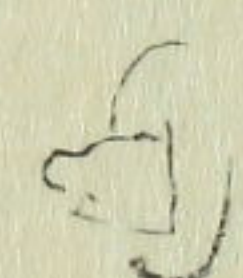
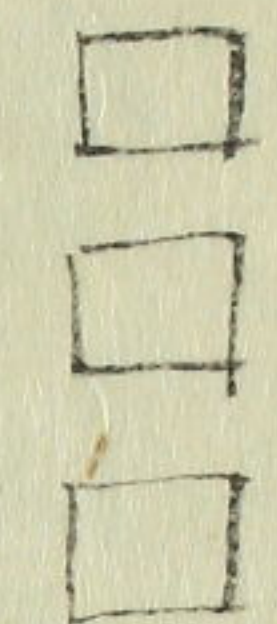
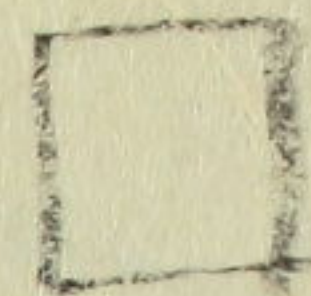
まをりま

一ま後七か

まをりま

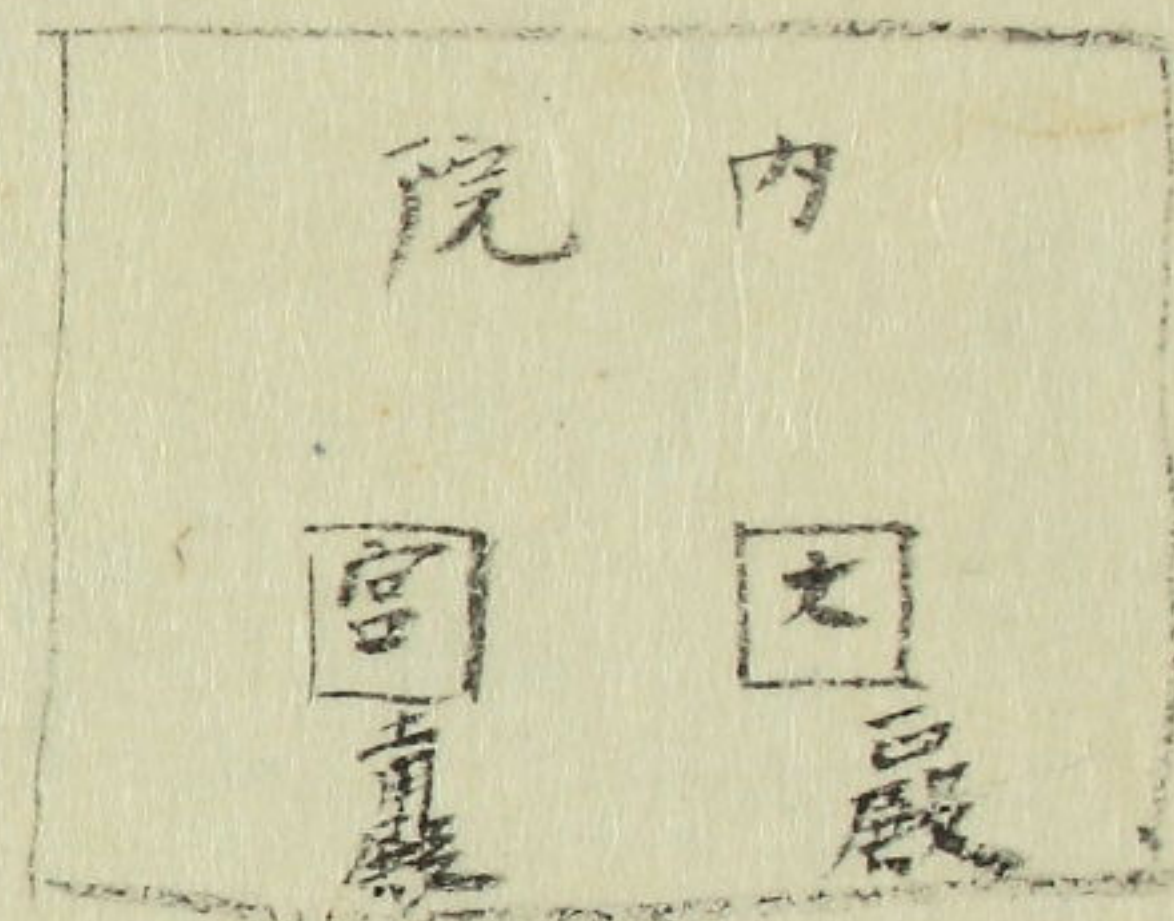
まをりま

まをりま

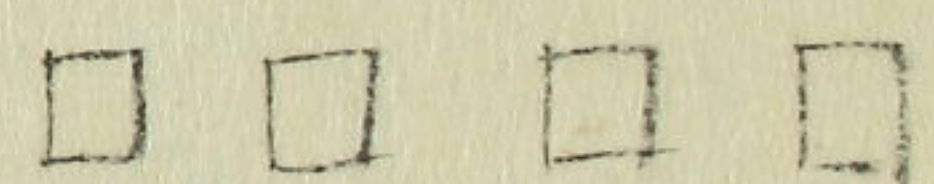


神

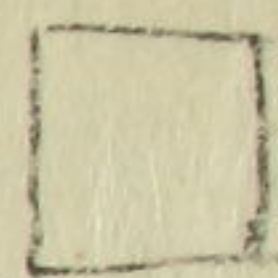
清



吉



方



汗 藏

